HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	本草和名の成立と継承 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	武, 倩
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13408号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74470
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Wu_Qian_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　武　倩

学位論文題名
本草和名の成立と継承

・本論文の観点と方法

近年、『本草和名』に関する研究は、主に国語学と医史学の分野で行われてきた。国語学の分野においては、一般辞書への引用という観点から研究が進んでいるが、諸本の把握が不十分であることと、江戸考証学者の研究成果が参考にされていない傾向があることが問題点として挙げられる。それに対して、医史学の分野においては、『本草和名』の成立背景や現存状況に関して詳しい調査がなされているが、内容の分析が十分でなかった。本研究は江戸時代の考証学者の研究を踏まえた上で、書誌学、医史学、情報学の知識を取り入れ、国語資料である『本草和名』の成立と継承を明らかにするのを目的とする。具体的には『本草和名』の成立に関して、その諸本、出典、構造を論じ、その成果を踏まえて『本草和名』の継承に関して、『倭名類聚抄』での引用の方法の究明を目指す。

本研究の成果を説明する前に、そもそも『本草和名』とはどのような書物であるのか、さらにこれまでどのような研究がなされてきたか、概略を述べておこう。

『本草和名』は延喜年間（918 年頃）に、侍医である深根輔仁が醍醐天皇の勅命を奉じて編纂した日本最古の本草薬名辞典である。「本草」とは東洋医学で薬の原料となる薬用植物のことで、広く動物・鉱物も含むが、その学問は本草学と呼ばれる。本草学は中国で生まれた学問であり、本草書の編纂は後漢の『神農本草経』まで遡る。それを校訂・加注したのが陶弘景（六朝）の『神農本草経集注』である。さらに、この『本草経集注』を増補・加注したのが蘇敬（唐）の『新修本草』である。『新修本草』は 659 年に高宗の勅命を奉じて編纂された。それが奈良時代に日本に導入され、医学生の教科書として重宝された。

『本草和名』は『新修本草』を主体とし、『食経』等によって増補され、実に千種以上の薬用動植鉱物を収録している。薬物の漢名に万葉仮名和訓や日本での産出状況を注記するので、平安時代の語彙・文化・物産などを知るための貴重な資料である。中国本草学を日本化させた先駆的な存在でもある。

本書が成立した後に、平安中期を代表する漢和辞典『倭名類聚抄』(934 年頃)、日本最古の医学全書『医心方』(984 年頃）などにも引用され、一般辞書や医学書の編纂にも大きな影響を及ぼした。その後、長く所在不明になっていたが、江戸時代になって、その古写本が幕府の紅葉山文庫で発見された。これを機に、多くの考証学者が本書の研究に取り組んできた。重要な人物としてまず挙げられるのは、古写本を発見した多紀元簡である。元簡は紅葉山文庫古写本を校訂し、出版したことによって本書を再び世に広めた。その後、狩谷棭斎、小島宝素父子、森立之父子はそれぞれ異なった観点から『本草和名』について詳しく研究し、本書の版本に書き入れを加えた。このような研究の蓄積をもとに、狩谷棭斎は『倭名類聚抄』に対する箋注を完成させた。小島宝素と森立之は『新修本草』や『神農本草経』など中国の古逸本草書の復元を成し遂げた。これらの研究成果は江戸時代の考証学の一つの到達点を示しており、現在の文献研究においても参考されるべき所が多い。

・本論文の内容

本論文は、序論と結論を入れて、8 章から構成される。第 2 章から第 7 章までの 6 章は本論に当たる。

第 1 章序論では、本研究の背景と目的を述べ、論文の構成を述べた。

第 2 章では、『本草和名』に関する先行研究を、江戸明治初期の研究と明治以降の研究とに分けて整理した。江戸明治初期の研究では、多紀元簡、狩谷棭斎、小島宝素・尚真父子、森立之・約子父子らの考証の成果を紹介した。明治以降の研究では、書誌学、国語学、医史学の分野別に、代表的な研究を紹介した。

第 3 章では、日本と台湾の所蔵機関で積み重ねた書誌調査に基づき、『本草和名』の写本（万延元年影写本、博愛堂鈔本）、版本（松本書屋本など）、及び諸本間の関係について考察を行った。従来、国語学の研究分野においては知られていなかった万延元年影写本、松本書屋本、博愛堂鈔本について紹介したが、この成果は、今後の研究に確かな底本情報を提供できるという点で、有意義なものであるといえよう。

第 4 章では、『本草和名』の出典を『新修本草』とそれ以外の漢籍に分けて検討した。『新修本草』については、小島宝素によって行われた『本草和名』との校合を通して、両書の関係を考察した。それ以外の漢籍出典については、佚書も多く含まれることから、『日本国見在書目録』（藤原佐世、891 年頃）と中国の正史芸文・経籍志への掲載状況、ならびに現存状況を調査した。

第 5 章では、この研究のために構築した『本草和名』データベースに基づき、本書における薬物について、その漢名の列挙の仕方と和名の示し方を考察した。漢名を見出し項目の漢名と項目内の漢名とに分けて検討し、項目内の漢名に対して、その列記形式を分類・統計したが、これは関連する先行研究にはみられない初めての試みである。

第 6 章では、『倭名類聚抄』における『本草和名』の出典注記について検討を行った。まず、『倭名類聚抄』における「本文」の成立要素を『本草和名』に求めることができることから、前者は後者の出典注記を手掛かりに本文を掲載したと推論した。次に、従来の研究で殆ど検討されていなかった『新修本草』以外の共通出典に注目し、両書の間で共通する部分がどれほどみられるのか、という点について分析を試みた。そこから、確実な例をもって、諸家食経書、医方書等の引用においては、『倭名類聚抄』は『本草和名』をそのまま引用するのではなく、原典を直接参照した可能性があることを指摘した。

第 7 章では、『倭名類聚抄』における『本草和名』の誤引について考察した。まず、狩谷棭斎の箋注を手掛かりにして、「誤引」という概念を導入し、それが生じた背景を分析した。次に、近年の研究にみられる「孫引き」説について、追認した上で批正を加えた。さらに、誤引の体系化も試みた。最後に、棭斎の考証については、その研究がテキストの校訂に止まらず、内容の分析にまで及んでいることを指摘した。

以上、本研究の重要な成果を挙げれば、多分野に利用される『本草和名』について新たな研究材料を提供したこと、江戸考証学者の研究成果を再評価したこと、データベースによる構造の分析を実現したこと、『倭名類聚抄』との引用関係について従来の研究を一歩前進させたことの四点である。